

―― 〇二〇年の東京五輪の開催が迫る中、東京都心ではオリンピック・パラリンピック施設の建設が急ピッチで進む。また、それに合わせて、渋谷駅の周辺に象徴されるように、大規模な再開発事業がさまざまの勢いと規模で続いている。一方で、ここ数年来、各地の美術館で建築をテーマとする展覧会が数多く催されており、二〇一七年九月の「安藤忠雄展」では三〇万人、翌一八年の「建築の日本展」では五〇万人を超える入館者を記録するなど、建築展は今や社会に認知される一大イベントにもなった。しかし、こうした建設ラッシュの現状に驚き、建築展の盛況ぶりに隔世の感を覚えながらも、果たしてどれほどの建築が市民に共有されているのだろうか、との疑問が拭えない。ここでは、そんなことを考えるきっかけになった個人的な経験について書き留めておきたい。

二〇一八年九月から、同志社大学文学部の兼任講師として、八〇人ほどの学生たちに、「建築」という世界から見えてくること」というテーマで、ル・コルビュジエやルイス・カーン、前川國男や村野藤吾など、主に私の研究対象である近代建築のことを半期一五回にわたって講義している。彼らは、文学部にとどまらず、社会学部や商学部、神学部など、幅広い分野の学生たちである。内容については本務校と特段変えてはいない。しかし、その同じ講義を建築界と無縁な学生たちにするとき、不思議な思いにとら

各 人 各 説

建築を社会が共有する回路を作り出すために

京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系 美術工芸資料館 教授

松隈 洋

Hirosbi Matsukuma



われる。そして、気がつけば、次のようなことを話すことが多くなっていた。

「みなさんは、建築を意識して見たことはないと思います。日本では、大学で建築を専攻しない限り、住まいから都市へと広がる生活環境を形づくってきた身近な建築を学ぶきっかけがないからです。そして、例えば、ある日突然に慣れ親しんだ建物が取り壊されて、そこに真新しい建築ができたとしても、なぜ取り壊されたのか、なぜこんなデザインなのか、を知る術もありません。このことは、本来社会的な共有財産であるはずの建築や都市が、建築界のただけで論じられ、決定されていることを意味します。だからこそ、皆さんには、建築という世界から見えてくることを知って欲しいし、逆に、建築界は、建築を広く社会が共有できるような回路を作り出す責任があると思います」と。

ある学生の書いた感想文に、「建築の存在に気がつかなかったことを知り、これまで損をしてきたように思いました」とあった。最後に私の勝手な夢想を記せば、小学校の家庭科で住まいや身近な建物の歴史を教える機会を作ること。そして、建築界がそれに協力し、建築に対する社会全体の共通理解のレベルを向上させる仕組みを構築することによって、より良い生活環境を育む好ましくも楽しいサイクルを作り出していけないだろうか。やれることは山ほどあるし、どこからでも始められると思う。